墳墓の上に置かれた鎮石

47 保科正之公墳墓（見祢山）

保科正之の死に際し、葬儀大奉行に任命された家老の友松勘十郎は、陰暦正月六日に墳墓地を選定しました。最初に南北六十間、東西五十間を整地し、その真ん中に南北三十間、東西三十二間の柵を作り、四方に鳥居を立て、その中央に小屋を作り、棺を安置して三月二十六・二十七日の両日にわたって葬儀を執り行いました。その後棺の所に円墳を築き上げ、頂上に「土津神墳鎮石」と刻んだ八角形の鎮石を置きました。墳墓の南には「会津中将源君之墓」と刻んだ竿石が置かれ、さらに南にある土津神社のところまでの参道に玉石をしきつめ、神社の境内には正之の事績を書いた石碑を建てました。

（町指定史跡）

48 土津霊神之碑（見祢山）

保科正之の履歴を刻んだ石碑で、碑文は山崎闇斎が撰文し、筆者は当時第一等の能筆家土佐左兵衛高庸である。高さ7.3mと墓碑としては日本最大のものであり、竿石は延宝元年（1673）中に荒取りをして、七月に引出し、翌年の二月十二日までかかって運びこんだ。それより碑石の細工にかかり、四月二十四日に作り上げた。次に四方に足場を組み、碑文を彫り始め、約五ケ月後の九月二十二日に墨入れを終え、完成した。碑文の文字数は1943字、文字の大きさは三寸（9cm）四方である。

（町指定重要文化財）

49 田中正玄の墓（御廟）

会津藩の家老を三十四年間、城代を五年間務め、藩の基礎を固めた人である。正之公が自分の埋葬の地を見立てられるために見祢山に来られた際、正玄の墓に来られ、「正玄ここにいたか、自分も間もなくまいるぞよ」と言われ、ハラハラ涙を流されたのを見て、お供の家臣一同も涙を流し、正之公を仰ぎ見る者もいなかったという。

50 忠彦霊社（磐根・土田）

会津藩家老友松勘十郎氏興は正之の遺命を奉じて墳墓を築き、土津神社を造営したが、その神社経営の資として土田堰を造り、土田新田村を開拓した。村人はその恩義に報いるため忠彦霊社として氏興を祀った。

51 服部安休の墓（神道山）

正之に仕え、その命を受けて神道の研究を専らにし、土津神社初代の神官となった。因みに安休は森蘭丸の孫である。